

Title	山川の神々(二) : 山海経の研究
Sub Title	The gods of the mountains and the waters in ancient China : researches on the "Shan-hai-Ching (山海経) (II)
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.1 (1969. 8) ,p.73- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690800-0073">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690800-0073</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 山川の神々 (二)

— 山海經の研究 —

伊藤 藤清 司

## 第二節 風水の神

邑里を圍繞する山林藪沢には、獯猛なる鳥獸や蝮蛇が跳梁し、「猛獸ハ顛民ヲ食イ、贅鳥ハ老若ヲ攫イ」(「淮南子」覽冥訓)、また妖怪たちが出没して人々を襲うと信じられていた。おそらく、村びとたちは、故なくして、山沢の奥深くへ立ち入ることを憚っていたにちがいない。だが、人々が山岳や峽淵に敢えて近づぐことを忌み怖れていたのは、そればかりではなかつた。山沢が野獸・毒蛇の巢窟であり、深山・幽谷が妖怪たちの棲み処かであり、繩張りであつたのみならず、それらの空間はまた、人々が日頃、もつとも畏れ憚っていた鬼神の聖域でもあつたからである。

齊の景公が宋国を討つべく、その軍を率いて、泰山を通過したときのこと、たま／＼一夜、景公は、夢に二人の丈夫がその行く手に立ちふさがつて激怒するをみた。夢占いがこれを「泰山の神が怒っている」と占い、そこで、早速、景公は祝史に命じて、泰山の神を祀らせているが、もちろん、この二丈夫の出現は、無断で神の領域を侵したことに對する泰山の神の怒りの表示と解すべきものであつた。<sup>(69)</sup>この景公、泰山の神の怒りに会うの一幕は、その史実としての真偽のほどは別として、当時の人々の抱く山岳觀を物語るものとみられるのであるが、つぎにかゝげる「礼記」の記事もまた、古代中

国人のもつ山川観の本質を垣間見せる一つの資料である。

山林・川谷・丘陵ハ能ク雲ヲ出シ、風雨ヲ為シ、怪物ヲ見ワス。皆ナ神ト曰ウ。(祭法)

山岳や溪谷から湧き出る雲や霧、峰々から吹きおろす風や雨に、古代の人々は神祕な威力を感じ、それらの現象を単なる自然現象とは観象せず、かの山・かの谷に神鎮まる鬼神たちのなせる業と信じていたのであつた。

このような信仰は、「山海経」の中にも、随所に認められる。たとえば、西山経次三の

符惕ノ山……神・江疑ハ之レニ居ル 是ノ山ヤ怪多シ……雨・風・雲ノ出ズル所ナリ

とあるのはそれで、これは、妖雲を放ち、風雨をおこすなど、さまざまなる怪異を働く鬼神が、この山の上に棲むことを記録したもので、符惕山の山神・江疑が、風水の神として、山麓一帯の村びとたちの畏怖・信仰の対象であつたことを伝えるものにちがいない。このことは、つぎの東山経の記述によつて、さらに、鮮明に窺うことができるであろう。

戸胡ノ山自リ無皋ノ山ニ至ル 凡ソ九山……其ノ神ノ状ハ皆ナ人身ニシテ而カモ羊ノ角アリ……是ノ神ヤ見ワルレバ則チ風雨水 敗ヲ為ス (東山経次三)

敗とは災害によつて農作物が害なわれ、凶作となること<sup>(70)</sup>。戸胡・無皋などの峰々の山神が現われ、容赦なき激しい風雨をくだす。ために、村々に洪水が起こり、せつかくの実りの田畑は流失し、邑も田も荒廢に帰するのであつた。

光山の計蒙もまた、暴風雨の神である。この計蒙神が、ときに、その棲み処である光山の山上から降臨して、漳淵に神遊びをする。嵐は、その時におこるものと伝え信じられていた。

水を司どる竜蛇の神が、高い山岳・丘陵に棲む例は、日本にも多い。竜蛇神の代表的な大蛇は、「峰(丘)ノ靈」の意であるともいわれ<sup>(71)</sup>、三諸岳の神も大地であり、「日本書記」<sup>(72)</sup>。胆吹山の山神も大蛇に化して出現し、「同上」<sup>(73)</sup>また、万葉人は、雪雨を降らせる蛇龍<sup>オカミ</sup>は岡の上におる、と歌つて<sup>(74)</sup>いる。光山の山神である計蒙の首は、竜のそれであるといわれている

るが、竜頭は水神の表象であつた。

光山……神・計蒙之レニ処ル 其ノ状ハ人身ニシテ而カモ竜ノ首ナリ 恒ニ漳洌ニ遊ブ 出入ニハ必ズ飄風・暴雨有リ

中山経次八

秦の始皇帝が南巡して渡江の最中、にわかの大風に遭遇し、御座船が難渋して進まなかつた。おそらく、これは無断で  
おのが域領に侵入する者に対する神の怒りの表象であつたろう。とにかく、この嵐を湘山の神の仕業ときいて、始皇は激  
怒し、囚人三〇〇〇人に命じて、樹木を悉く伐り倒して全山を裸にさせ、湘山の神に報復したといわれている。<sup>(75)</sup>この伝承  
によれば、始皇帝乗船の行く手を阻んだその風雨の神の棲み処は、江湖の中ではなくて、その神の名が示すように山の  
にあつたのである。

ところで、この湘山の神は、古来、湘君・湘夫人と呼ばれる舜の王妃であるとも伝えられている。<sup>(76)</sup>そして、山経にいう  
洞庭山の帝の二女も、またこの伝承と無関係ではなからう。<sup>(77)</sup>この神々は洞庭湖一帯の水域を縄張りとする風水の神で、つ  
ねには、洞庭山の山上に神鎮まつているといわれるから、始皇が禿げ山にしたと伝えられる湘山は、実はこの洞庭山では  
なかつたろうか。少なくとも、信仰上では、両山は同質の神々の棲む山であつたと考えられなければならない。というの  
は、この洞庭山の女神たちは、とき折、山を降つて、揚子江が湘水・沅水と合流するあたりに出遊し、さらに、澧水など  
にも遊行する。そのたびごとに、雨・風が荒れ狂い、嵐が吹きまくるものと、土地の人々は信じていたのである。

洞庭ノ山……帝ノ二女 之レニ居ル 是レ常ニ江洌・澧沅ノ風ノ瀟湘ニ交ワルノ洌ニ遊ブ 是レ九江ノ間ニ在リ 出入  
ニハ必ズ飄風・暴雨ヲ以ツテス 中山経次十二

中国の古代神話における洪水伝承の占める位置は大きい。このことは、河川の流域での農耕生活を基盤に発達した中国社会では、太古以来、氾濫が人々をいかに苦しめ、悩ましてきたかを物語るものである。<sup>(78)</sup> 文崇一は求雨の対象ともされる山神と、水府を理治する水神とは、元来、一元的な存在であつた<sup>(79)</sup>。洪水はおそらく、雲や雨・風を掌管する符惕山の江疑神や、光山の計蒙の神、そして尸胡などの山神たちのなせる業でもあつたにちがいない。そして、洞庭山の神・湘山の神々のまきおこす飄風・暴雨は、江湖をゆく船にのみ仇をしたのではなく、必ずや流域沿岸の家々や田地にも大きい被害を及ぼし、村びとたちを悩ましてきたに相違ないのである。

しかし、水害は、なかば擬人化されたこれらの山神たちばかりではなく、山沢に棲むさまざまな「怪物」たちによつても、ひきおこされるものと、人々は信じていたのであつた。

陽山に源を發する陽水が伊水に合流するあたり、今日の河南省嵩<sup>(80)</sup>地方の人々によつて、獸身で人面、しかも翼の生えた爬蟲の姿の怪異が、川のこゝかしこに棲んでおり、それらが出現すると、その邑里は水害に見舞われると信じられていた。

陽山……陽水ハ焉コニ出デ 北流シテ伊水ニ注グ 其ノ中ニ化蛇多シ 其ノ状ハ人ノ面ノ如クニシテ而カモ豹ノ身 鳥ノ翼アリ 而カモ蛇行ス 其ノ音ハ叱叫スルガ如シ 見ワルレバ則チ其ノ邑ニ大水アリ 中山經次二

化蛇という名は、蛇にして尋常の蛇に非らざるその怪物のミステリアスな姿に基づく呼び名であろう。蛇は水に縁故が深い。この化蛇が陽水の水怪とされ、その出現は里人の怖れるところであつたが、さきにあげた柴桑山の飛蛇<sup>(81)</sup>や神困山の飛蟲<sup>(82)</sup>、そして爰翼山の怪蛇<sup>(83)</sup>なども、あるいは、陽水の化蛇同様に、水害をもたらす水怪であつたのかもしれない。

河南の新安県地方に比定される敖岸山<sup>(84)</sup>の山麓一帯の邑里では、氾濫は夫諸と呼ぶ四本の角ある白鹿に似た怪獸の去来に因縁があると信じられていた。

荇山ノ首ヲ敖岸ノ山ト曰ウ……神・熏池ハ之レニ居ル 是コニ常ニ美玉出ツ……獸有リ 其ノ獸ハ白鹿ノ如クニシテ而カモ四ツノ角アリ 名ヲ夫諸ト曰ウ 見ワルレバ則チ其ノ邑ニ大水アリ 中山経次三

この夫諸は、「玉篇」が鹿の一種としてあげる麋・麋の前身であろう。たゞし、四本の角をもつ白色の鹿であるこの夫諸は、世の麋鹿の類とは異なり、この敖岸山の山神であると想像されるが、あるいは、熏池の神がこの山上に鎮座し、君臨しているところからみると、夫諸はそれ自体、山鬼・山神的存在でありながら、主神・熏池の差配をうけるミサキ・使獸としての性格を帯びていたのかもしれない。「日本書紀」仁徳六七年の条に、吉備国の川島河の主である大きい虬ミツチが、鹿に化して示現したと伝えられる。あるいは、鹿状の夫諸は山神・熏池自身が、示現するときの化身の姿であつたのかも  
しれない。

なお、漢代以降、白鹿は瑞應獸とされ、その出現を吉祥として歓迎・喧伝する。しかるに、中山経によれば、河南・新安地方では、白毛の鹿のそれを、洪水をもたらす凶神獸としている。敖岸山の夫諸信仰は、応瑞獸思想と関わりをもたない、より古い信仰であり、あるいは、そうした思想の影響をこうむらないローカルで独特な信仰であることを物語るものと考えられる。

渭水の上流・甘肅省天水県地方(85)では、洋水に棲むある種の魚が洪水をひきおこすものという伝承があつた。

邽山……濛水ハ焉コニ出デ 南流シテ洋水ニ注グ 其ノ中ニ黄貝・羸魚多シ 魚身ニシテ而カモ鳥ノ翼アリ 音ハ鴛鴦ノ如シ 見ワルレバ則チ其ノ邑ニ大水アリ 西山経次四

「玉篇」・「広韻」等にも、「羸 魚ノ翼有リ。見ワルレバ則チ大水アリ。」という。この羸は西山経の濛水の羸魚のごとき存在を伝えたものか、あるいは同一の伝承をのべたもので、ことによると、西山経に基づいた収録であつたのかもしれない。ところで、羸魚(羸)は、この地方の川の面を飛翔する川魚の類のようにも想像されるが、しかし、流沙を流れる観

水には、これと似た属性をもつ文鯨魚が棲み、夜陰に乘じ、西海より東海に飛翔すると伝えられている。(西山経次三) 濛水の羸魚にも、これに類する何らかの妖しげなる伝承があつたのではなからうか。そうした伝承を背景に、羸魚は濛水の氾濫の因とされ、流域の里人たちの怖れる水怪とされたのではなかつたらうか。

洪水はひとり一里一邑に災害を与えるのみならず、数邑・数十邑を襲い、広範な地域に横溢して、数多の人家や耕地を荒廢に化することも少なくない。長右や胜遇は、そのように全県全郡を害ない、国中に氾濫をひきおこす水怪であつたといわれる。おそらく、これらの水怪は、より広い地域社会の共有祭神的性格をもつものであつたことを意味するのである。

長右ノ山ニ草木無ク 水多シ 獸有り 其ノ状ハ禹ノ如クニシテ而カモ四ツノ耳アリ 其ノ名ハ長右 其ノ音ハ吟ズルガ如シ 見ワルレバ則チ郡県ニ大水アリ

南山経次二

この山の名は、そこに棲む異獸・長右の名に基づくといわれる。(郭注)<sup>(86)</sup>「広韻」は右の経文を引き、長右を長舌に作り、畢沅も同じように長舌説をとる。<sup>(87)</sup>とすれば、この山は長い舌を吐く怪獸の棲み処であつたことにならう。戦国時代の楚の地の墳墓から、いくつかの吐舌像が発掘されており、吐舌は造形・絵画上の、楚地独特なモチーフである。<sup>(88)</sup>長舌(右)とは、このような面貌の怪獸に与えられた名かとも想像される。たゞし、今日までに明らかにされた楚墓出土の吐怪獸像の中には、禹に似て、しかも、四個の耳のあるものの知見はない。しかも、長右は長石<sup>(89)</sup>・長本(肱)<sup>(90)</sup>の譌字説も考えられないわけではない。長右の解明は後日を俟つものがあるが、この怪獸は、草木のない、しかも湿地ないし水沢の多い長右山に棲む水怪であつたと伝えられている。「輟耕録」に引く「山海経」は、禹が水害獸の巫支祁を捕えて、軍山下に鎖で縛いだといひ、他方、この巫支祁は猿状の水獸であつたという伝承がある。<sup>(91)</sup>禹状の長右とはこの巫支祁のごとき

怪獣であつたのではなからうか。

豹の尾を振り、虎の齒をむきだして、しきりに嘯いている西王母の棲み処は、西方の玉山の巔であると伝えられる。(西山経次三 玉山の条) この山には、さまざまな奇鳥・怪獣が群棲するという。胜遇もその一つであつた。

……鳥有り 其ノ状ハ翟ノ如クニシテ而カモ赤シ 是レ魚ヲ食ウ 其ノ音ハ録スルガ如シ 見ワルレバ則チ其ノ国ニ大水アリ

胜遇はその名の意味も、その実体も詳らかでない。たゞし、これによつて、長右山同様に、玉山の山中にも水禍をもたらす山の怪のおるといふ伝承のあつたことは認められるのである。

大洪水は、ときに一郡一國に溢れて広く天下に漲る。東方の空桑山に棲むという輪輪は強大な神威をもつて、天下悉くを氾濫させまじき神獣であつた。おそらく、この空桑山の輪輪は、かつて、より広域な社会の共有祭神的性格をもつていたことを物語るものであらう。

空桑ノ山……獸有り 其ノ状ハ牛ノ如クニシテ虎ノ文アリ 其ノ音ハ欽ズルガ如シ 其ノ名ヲ輪輪ト曰ウ 其ノ鳴クヤ自カラ叫ブ 見ワルレバ則チ天下ニ大水アリ 東山経次三

空桑山は琴瑟の用材を産出する山(「周礼」春官・大司楽)とされるが、この山は魯の國に在つて、孔子生誕の地であると伝えられ、また、そこは洞穴で、孔竇とも呼ばれる云々など、古来、諸伝説に彩どられてきた山である。しかも、この山の伝承について、「淮南子」に、

舜ノ時、共工ハ洪水ヲ振滔シテ以ツテ空桑ニ薄ル。(本経訓)  
また、「呂氏春秋」に



帝顓頊ハ若水ニ生マレ、実ニ空桑ニ処ル。乃チ登ツテ帝ト為ル。(五古楽篇)

とあるところを察すれば、空桑の山は天界につらなる神聖なる高山であり、原初時代の洪水説話とも関係の深いことがわかる。<sup>(96)</sup>空桑山はこうした神話的な山岳であり、洪水神話に縁故をもつていたと想定されるから、この山の輪輪が洪水に縁因のある怪獣であるのも、また由なきことではない。そして、この怪獣が牛状であるといわれているのは、沈溺供犠として、牛を水神に捧げて祈る民俗や、水神が牛馬の姿をとるといふ信仰を想起させるものがある。

他方、特殊な牛を殺すことが、洪水の因であるとする民間信仰や、水中からの靈牛の出現や湖沼に棲む神牛の咆哮が暴風雨などの凶徴であるとする俗信は、世界的な分布を示している。これについては、石田英一郎の「河童駒引考」の中に、豊富な事例をみることができが、つぎに、中国の戦国時代にあつた一つの類型伝承をあげて、輪輪の実相をしる比較資料とする。

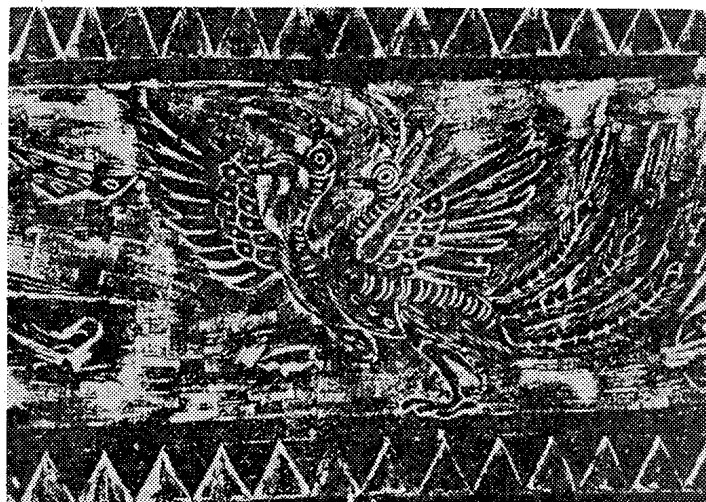
李冰は秦の昭王に任ぜられて蜀守となり、成都付近の河川の灌漑に當つた。当時、この地方には、毎年、江神に童女人を、その婦として捧げる人身供犠の習俗があつた。李冰は土地の童女に代えて、おのれの娘を江神に嫁がせるが、のちには、ついに江神と斗い、これを死に至らしめたのである。ところで、この江神は蒼牛の姿をとつて示現し、李冰と争つたと伝えられているが、<sup>(97)</sup>水神が牛の姿をとつて顕現するこの李冰説話に照して、同じく牛の形をとる空桑山の輪輪が、この山に鎮座する水神的存在であつたことを想像するのである。

剡山の合窳や、夸父に似るといふ豺山の怪獣も、おそらく輪輪と同一カテゴリーの、山中に棲む水鬼であろう。

剡山……獸有り 其ノ状ハ彘ノ如クニシテ而カモ人面 黄ノ身ニシテ而カモ赤キ尾アリ 其ノ名ヲ合窳ト曰ウ 其ノ音ハ嬰兒ノ如シ 是ノ獸ハ人ヲ食ウ 亦タ 蟲蛇ヲ食ウ 見ワルレバ則チ天下ニ大水アリ 東山経次四  
豺山……獸有り 其ノ状ハ夸父ノ如クニシテ而カモ彘ノ尾アリ 其ノ音ハ呼ブガ如シ 見ワルレバ則チ天下ニ大水アリ



第二図 比翼の鳥神



第三図 比翼の鳥

夸父は、西山経次三の崇吾の山に棲む拳父と称呼が共通する。崇吾山の拳父は禺<sup>(98)</sup>猿猴に似るといわれるから、あるいは、狢山の夸父も猿状の怪物ではなかつたらうか。猿と水との因縁は浅からざるものがあり、水辺の猿が人や家畜を攫う民間伝承は、中国大陆にも日本の列島にも少なくない。左記の東山経の記述は、狢山や崇吾山の猿状の怪物が山を降つて諸川に出没し、たゞに人畜のみならず、田土・家屋をも流し去る大氾濫をもひきおこす靈力ある水怪であるという伝承を語るものであらう。

東山経次一

拳父とともに崇吾の山奥深く棲む蛮蛮の鳥も、その姿がすこぶる怪異で、いわゆる比翼の鳥の兼兼に似るが、これまた、天下の大洪水を招く不祥の妖鳥として、人々の畏怖の対象であつた。

崇吾ノ山……獸有リ 其ノ状ハ禺ノ如クニ  
シテ文アル臂……善ク投グ 名ヲ拳父ト曰  
ウ 鳥有リ 其ノ状ハ鳥ノ如クニシテ而カ  
モ一翼一目ノミ 相得バ乃チ飛ブ 名ヲ蛮  
蛮ト曰ウ 見ワルレバ則チ天下ニ大水アリ

西山経次二

「爾雅」に「南方ニ比翼ノ鳥有リ、比セズ

ンバ飛バズ。名ヲ兼兼ト曰ウ。」(釈地)とは、実は、雌雄一つがいの鳥が相偶して一体をなすさま(第二図・第三図参照)<sup>(100)</sup>を指すが、<sup>(101)</sup>蛮蛮もまた、「比翼の鳥」の類である。「呂氏春秋」・「管子」・「逸周書」などによれば、比翼の鳥は比目の魚・連理の枝とならび称せられる瑞鳥である。「史記」にも、覇を唱える桓公を管仲が諫める言葉の中に、かつて、先聖の封禪に際して、瑞徴が各地より致つたとし、「東海ハ比目ノ魚ヲ致シ 西海ハ比翼ノ鳥ヲ致ス」(封禪書)ことをのべている。山東漢武梁祠の壁面にも、比翼の鳥・比目の魚の図あり、その讚に、「王者ノ徳高ケレバ 遠クニシテ則チ至ル」とあるのは、周知の通りである。以上のように、漢以降の諸資料は、比翼鳥を応瑞の鳥として、その飛来を歓喜した。ところが、その出現を不吉とし、しかも、具体的に大洪水を将来する水怪とするのはひとり山経のみである。この点に関して、小川琢治は山経が妄りに後人の手によつて改竄が試みられず、比較的古い伝承を保存している証拠としている。<sup>(102)</sup>山経の独自性<sup>(103)</sup>ないし、その成立の古さを推定させる一つの拠りどころとならう。

僻陬の地たると中原地方たるとを問わず、中国各地の山川には、さまざまな水神・水怪が棲んでおり、風雨や氾濫による災害はそれらの所業とされていたのである。R・ヴィルヘルムによれば、黄河流域の住民たちは、彼らが大王と俗称している黄河の神が、竜・牛・馬などのさまざまな形態で出現するものと伝えており、しかも、その出現に続いて、必ず洪水が生じるものと、人々は近年まで信じていたという。<sup>(104)</sup>これは三千年来の中国民間信仰の伝統を物語るものである。中国古文献に、河伯・洛伯<sup>(105)</sup>などの名で語られている水神たちの原初の実体も、おそらく、上にみるような鳥獣蟲魚の姿をとる怪異であつたものと想像される。「韓非子」に、河伯は大魚なりとし、<sup>(106)</sup>やゝ時代が降るが、「搜神記」その他に、河伯が鼇<sup>(107)</sup>の姿をしていると伝えているのも、このことを裏書きするものである。

古来、農耕生活にとつて、水は重要な関心事であつた。人々は、その水を支配し、風雨を司り、そして、暴風雨・洪水

の災禍を与える山川の水神・水怪たちを畏怖し、その被害から逃れようと、歳ごとに、あるいは、事あるたびに、相集つて供物や人畜の犠牲を捧げて、祭祀を行なつてきたのである。さきに示したように、蜀の地方で、江神とされる牛状の水怪に童女を犠牲とした土俗は、その一つの例であるが、同じく戦国時代の魏の要衝・鄴(今の河南省臨漳県)地方に伝わる河伯の嫁取りの行事は、この種の習俗としては最も著名なものである。<sup>(108)</sup>この地には、黄河の神にその花嫁として、邑人の処女を沈溺させることによつて、大洪水から避けられうるとし、巫女らを中心に大規模な人身供犠の儀礼が行なわれてきていた。鄴の長官として赴任した西門豹の力で、この伝統的な人柱の習俗はあとを絶つが、孔子の弟子の卜子夏に学び、文侯の賢臣として令名があつた西門豹の業績として、この事件が美談・師表化されたところに、逆に、古代中国社会において、水神・水怪に人間を供犠して、洪水の災禍から免がれようとした土俗の普遍性を窺い知るべきであろう。

## 風の神

家屋を毀し、樹木を倒し、農作物を荒して咆哮する強風にも、人々は神異を感じずにはいられなかつた。そして、その吹き荒れる大風を、神怪の仕業と信じていたのである。几山一帯では、この山中に棲む聞隣という山怪が、また、獄法山の地方では、山獬と呼ぶ怪異が姿を現わすとき、ともに強風が吹きまくるのであると、いゝ伝えられていた。

几山……獸有り 其ノ状ハ虺ノ如クニシテ黄身・白頭デ白キ尾ナリ 名ヲ聞隣ト曰ウ 見ワルレバ則チ天下ニ大風アリ  
中山経次十一

獄法ノ山……獸有り 其ノ状ハ犬ノ如クニシテ而カモ人面ナリ 善ク投グ 人ヲ見レバ則チ笑ウ 其ノ名ハ山獬 其ノ行クヤ風ノ如シ 見ワルレバ則チ天下ニ大風アリ  
北山経次一

聞隣については、山経以外の古史書に記録なく、その実相は委細不明であるが、山獬の善く投げ、人を見れば笑うなど

の属性は、山都・山獠や、西山経の谿次山の山怪・囂(109)のそれらと著しい相似がある。たゞし、山都等はいずれも猿猴の姿をしていると信じられ、獄法山の山獠のそれとの形態上に、犬猿の齟齬がある。また、山都らは、おおむね形が矮小で独脚、「行キ走ルコト風ノ如ク、見ワルレバ則チ大イニ旱ス。」(110)「神異経」 「毎歳中、人ト田ヲ営ム」(111)「広異記」など、農耕神的性格を帯びていることが指摘されている。風の怪である獄法山の山獠は、従つて、それらと異なる鬼神的表象であるらしくうけとれるが、風神は暴風雨を司る神の分身として考えられるから、獄法山の山獠は、山都・山獠や谿次山の囂などと、本質を同じくする山の怪で、凡山の閻嶽とともに、「礼記」のいう 山谷の「雲ヲ出シ、風雨ヲ為シ、怪物ヲ見ワス。皆ナ神」といわれるカテゴリーの山の神であつたと想像される。

大雅・桑柔の、

大風ハ隧ハキコト有リ 有空ナル大谷ヨリ

の句は、大風が大きい谷間の奥から吹き出ることを歌つたものと解される。(111) 隧風(112)「楚辞」九歌王注は遺風(112)「呂氏春秋」本味ほか)・衝風(112)「楚辞」九歌) 同様、疾風の意、「隧有リ」はその迅疾の形容である。南山経次三の旄山の条に、其ノ南ニ谷有リ 育遺ト曰ウ

と記録されており、この育遺は一に育隧とも作るとされる(郭注)が、育遺・育隧の名は大風の出る「風穴」伝承に由来するものであろう。この育遺の谷に、

怪鳥多シ 凱風ハ是レ自リ出ズ

と伝えられているのは、この証左である。そして、この育遺の風穴に棲む怪鳥は、おそらくは、風の鬼神であつたであろう。「説文」・「淮南子」覽冥に、鳳皇がとくに風穴に宿ることがないといつているのも、風穴に他の怪鳥が棲み、それらが

大風をまき起して災害を及ぼすという俗信の存在を裏書きするものである。

古くは卜辞にもみえ、降つては大荒経などにも記述されている東・西・南・北の風神である析・兗・彝・段の名や、「楚辞」その他に登場する有名な風伯・飛廉の名は、山経には収録されていない。森三樹三郎は、飛廉は元来、秦の地方のローカルな神と推定し、<sup>(113)</sup>藤堂明保は、山東の風姓を名のる種族の鳥トームであったとみている。<sup>(114)</sup>析以下の四方の風神（山岳神的性格は認められない）や、山経に収録された聞隣・山獬などが、しだいに、その風神としての神威を喪失し、その信仰的存在意義が衰微していった中で、一地方の神にすぎなかつたと考えられる飛廉が、国家統一のプロセスの間にあつて、しだいに、国家的風神に変じ、長安の都に構築された蜚廉の塔に勧請され、漢室の人々によつて祭祀され、<sup>(115)</sup>中国社会全体の共有神にまで高められていったのであろうか。もしそのように推測しうるとすれば、これもまた、風神としての聞隣等を収録した山経は、その古さ、ないし、その独自性を物語るものというべきであらう。

註

(69) 「晏子春秋」諫上 晏子は占夢者の托宣に反論し、「占夢者不識也 此非泰山之神 是宋之先湯与伊尹也」と答えているが、こゝでは、もちろん、占夢者と晏子の解答のいずれが妥か否かは問題の外である。

(70) 「礼記」仲尼問居の 四方有敗 の敗はわざわいの意（注 敗謂禍裁也）であるが、「呂氏春秋」孟夏紀に 蟲蝗為敗 暴風来格 秀草不実 や、「穀梁伝」莊公二八年の条の 豊年補敗（注 敗謂凶年）のように、水旱蝗兵などの災害によつて、凶作になることを意味した。

(71) 松岡静雄「新編日本古語辞典」（東京・刀江書院 昭和三十

山川の神々 (二)

七年 複製版）六〇八頁。なお、をは高地、ろが接尾語の例。

「あはをろの をろ田に生えるたはみづら 引かばぬるぬる

吾が言な絶え」（万葉 一四の三五〇一）

(72) 雄略紀七年七月の条

(73) 景行紀二八年十月の条

(74) 「万葉集」一〇四 藤原夫人の歌

わが岡の蛇籠にいゝて 降らせたる

雪にくだけし そこに散りけむ

(75) 「史記」始皇本紀 二八年の条

(76) 「史記」始皇本紀 二八年の条

岡本正「湘君湘夫人伝説について」（中国古代史研究会編「中

(八五)

八五

国古代の社会と文化」東京大学出版会 一九五七年 所収)は、湘君・湘夫人が舜の妻妃とされるに至つた伝承変容の歴史的背景についてのべている。森三樹三郎「支那古代神話」(京都・大雅堂 昭和十九年)も、湘君・湘夫人を洞庭湖水域におこる暴風雨の神信仰がもとの形であるとする。(上掲書 二四七頁)

(77) 岡本正は、中山経の「帝之二女」を、舜の妻妃とする必然性はないとし(「前掲論文」)また、文崇一も、帝の二女と湘君・湘夫人を関係づけるのは附会であるという。(「九歌中的水神与華南的竜舟賽神」(台湾・中央研究院「民族学研究所集刊」第一期 民国五〇年) 六三〜四頁)

しかし、湘君・湘夫人、湘山の神、洞庭山の二女神が、同一神でないとしても、共通する信仰基盤をもつ、同質の神的存在であつたと考えられる。

(78) 古代の洪水伝承に関しては、松本信広「中国洪水伝説の諸相」(松本信広先生古稀記念会編「東亜民族文化論攷」東京・誠文堂新光社 昭和四三年)その他、関係論著が多い。なお、出石誠彦「上代支那の洪水説話について」(「支那神話伝説の研究」二六七〜二九八頁)とくに、その「附録 前漢より唐末に至る洪水年表」(上掲書一九九〜三三三頁)は、先秦の洪水発生の大要を推測する上に、比較参考とされる。

(79) 文崇一「九歌中的水神与華南的竜舟賽神」(「上掲書」)六一頁、ならびに、「九歌中的上帝与自然神」(「民族学研究所集刊」第十七期 民国五三年) 六四頁

(80) 沅曰水経伊水又東北過郭落山注有陽山云世人謂太陽谷……当在今河南嵩県(「山海経新校正」)

(81) 柴桑山……多白蛇・飛蛇(中山経次十二)

(82) 神困之山……其下有白蛇有飛蟲(北山経次三)

(83) 猿翼之山……水多怪蛇(南山経次一)

(84) 中次三経 荇山之首曰敖岸之山 に畢沅が注解し、国語云 主荣隗而食湊洧 隗即新安県隗山 荣荇古音通 疑此山也(「山海経新校正」) というによる。

(85) 沅曰(邦) 山在今甘肃秦州西北三十里 秦有邦戎 漢有上邦県 其為字从邑 山以邑名也(「山海経新校正」)

(86) 以山出此獸 因以名之

(87) 「山海経新校正」に、沅曰旧本舌作右 とし、本文を 長舌之山……有獸焉其名曰長舌 と校定する。

(88) 伊藤清司「吐舌像に関する若干の考察」(日本民族学協会「民族学研究」第二九卷一号 一九六四年 所収)

(89) 中山経次六に、長石之山あり。「山海経」には、往々にして同名の山あり。

(90) 海外南経に、長臂国あり。南・西・北・東の四山経に対応する各方位の海外・海内・大荒経に、山経の異形神などと対応する属性をもつ異国・異人が少なくない。

(91) 「輟耕録」に引く山海経に「水獸好為害 禹鎖於軍山之下 名巫支祁」。「国史補」も「山海経」の引用文として、ほゞ同文をてのせている(黄芝崗「中国的水神」香港・竜門書店 一

九六八年。初版は上海一九三四年による。たゞし、両文とも現行山海経にはない。「古嶽瀆経」に、禹治水 三至桐栢山 乃獲 淮渦水神 名曰無支祁 亦作巫師祁（「太平寰宇記」）同じく、禹理水 三至桐栢山 驚風走雷……禹怒……乃獲淮渦水神 名無支祁……形若猿猴（「太平広記」卷四六七）

(92) 吳任臣「山海経広注」は、録を鹿の仮借字であろうという。古来、解註の少ないこの条文の訓解中では、聴くに価する一つの仮説である。麋鹿に似た啼き声を発して去来すると伝えられたものかも知れない。

(93) 郝懿行は「玉篇」の 鴟 音生 鳥也 を引き、胜遇を鴟遇なりとするが、その実体の解明には、ほど遠い。

(94) 郭璞注に、欽 或作吟（「山海経箋疏」）あるいは、或作唵（「山海経新校正」という。「漢書」息夫躬伝の、秋風為我唵の唵に、師古は注して、唵古吟字という。

(95) 「淮南子」本経訓の高誘注に、太平寰宇記引千宝云微在生孔子於空桑之地 今名孔竇とある。

(96) 松本信広「中国洪水伝説の諸相」（「前掲書」）

(97) 「風俗通義」（「太平御覧」）卷八九九 獸部・牛の項、「史記」卷二九の注に引くによる）

(98) 崇吾之山……有獸焉 其状如禺……名曰拳父 なお、後述の本文を参照のこと。

(99) 石田英一郎「前掲書」第三章 猿と水神の項

(100) 曾昭燏・蔣宝庚・黎忠義「沂南古画像石墓発掘報告」（文

化部文物管理局 一九五六年）図版二九および六二

(101) 伊藤清司「井逢と協脅と——古代シナのいわゆる怪力乱神に関する一研究——」（東京・三田史学会「史学」三六卷三・四号）四五〜六頁参照

(102) 「太平御覧」卷九二七に「博物志」に曰くとして「崇吾之山有鳥焉 一足一翼一目 相得乃飛 名曰鸛鵲 見則天下大水」とあるのは例外。たゞし、現行本の「博物志」には「…見則吉良 乘之寿千歳」（卷一〇）とある。御覧引用本は現行本と異なるか。または「博物志曰…」とするのは誤記か。

(103) 小川「前掲書初集」一六〇頁

(104) Wilhelm, R.: Chinesische Volksmärchen, Jena, 1927, s. 141

(105) 「竹書紀年」帝芬一六年 洛伯用与河伯馮夷鬪

「晏子春秋」齊大旱 逾時 景公召羣臣問曰「天不雨久矣 民且有饑色 吾使人卜云 祟在高山広水……吾欲祠河伯 可乎」（内篇諫上）

(106) 「韓非子」齊人有謂齊王曰「河伯大神也 王何不試与之遇乎 臣請使王遇之」為壇場大水之上而与王立之焉 有間大魚動 因曰此河伯」（内儲説上）

(107) 「搜神記」齊景公渡於江沅之河 鼉銜左驂没之 衆皆驚惕 古冶於是拔劍從之 邪行五里 逆行三里 至于砥柱之下殺之 乃鼉也 左手持鼉頭 右手挾左驂……觀者皆以為河伯也（「水経柱」河水注引）。「古今注」江東……呼鼉為河伯使



者 「同書」 鼈名河伯從事

(108) 「史記」滑稽列伝

(109) 渝次之山……有獸焉 其状如禺而長臂善投 其名曰鼈

西山經次一

(110) 竹村卓二「華南山地栽培民俗文化複合から觀た我が国の畑作

儀礼と田の神信仰」第二章Ⅱ南シナ山地焼畑栽培民の田の神・

山の神(「民族学研究」三〇卷四号 一九六六年)三二〇〜二頁

(111) 鄭箋に、大風之行有所從而來 必從大空谷之中 集伝に、

大風之行有隧 蓋多出於空谷之中

### 第三節 旱 魃 の 神

「詩經」大雅の雲漢は、大旱魃に雨を祈る歌といわれている。その中に、山川悉く枯れつくす苛酷な旱りは、「旱魃ガ虐ヲ為ス」ためだと訴える一句がある。すなわち、旱りの神が現われて、荒れいたぶるために、なべてのものを熱きつくさば、<sup>(116)</sup>「長サ二・三尺、祖身デ而カモ目ハ頂上ニ在リ……一名ヲ貉」と呼ぶといわれ、その魃の死体が、魏の咸平五年、たまたま、晋陽で発見されたが、身のたけ二尺、面頂に二つの眼があつたと伝えられる。<sup>(117)</sup>先秦時代にも、このような姿をとる旱魃神の表象があつたかどうかは確証はないが、獸形の魃神觀念が漢代ごろに存在していたことは、つぎに示す類例からも推測される。こうした神觀念はより古い時代に由来するものではなかつたらうか。

大荒北經は、つぎのような旱魃の發生神話を伝えている。

蚩尤ハ風伯 雨師ニ請イ 大風雨ヲ縦<sup>シタガ</sup>エル 黄帝ハ乃チ天女ノ魃ト曰ウヲ下ス

女魃は蚩尤を殺し、そのため大雨が止むが、再びは昇天できず、抛るなく下界にとどまつた。彼女の居るところは、そのため雨降らず、旱りが続くという。これと類型的な旱魃神話が大荒東経にも伝えられている。しかし、この方は旱りの神は天女ではなく、応竜である。

大荒ノ東北隅ノ中ニ山有リ 名ハ凶犁土丘 応竜ハ南ノ極ニ処ル 蚩尤ト夸父トヲ殺ス 復ビハ上ルヲ得ズ 故ニ数シバ旱リヲ下ス

この応竜にしる黄帝女魃<sup>(118)</sup>にしる、昇天できずに地上に逗留することが、旱魃の因であると説明されているが、このことは、それら旱り神がその住いから出て、姿を現わせば、その地方が旱魃に見舞われるといふ換えられるであろう。

旱りに苗種を害なわれ、来ん秋<sup>せき</sup>の収穫に悩む人々が、旱魃の終熄を祈り、慈雨の一日も早からんことを乞うた。旱りが旱鬼の出現によつて生起すると信じていたから、人々は旱鬼が速かに姿を消すよう、呪歌をうたい呪文を唱えて、神送りの儀礼を行なつたと考えられる。蚩尤退治の女魃の下界逗留を旱魃の原因であるとのべた大荒北経は、これに続けて、叔均がそのことを黄帝に報告し、女魃を北方の赤水の北に追放することになる。かくて、叔均は田祖<sup>たのかみ</sup>となつた。女魃はこれを畏れて逃散したが、時に、田祖の監視の眼をくぐつて現われることがあるとし、

之レヲ逐ワント欲スル者ハ令シテ曰エ 「神ヨ！北へ行ケ！」ト 先ンジテ水道ヲ除キ溝瀆ヲ決通セヨ

と記している。「神ヨ！北へ行ケ！」とは旱鬼追駆の呪文で、溝を掃除することは、雨水を呼ぶための呪術であろう。こうした呪文や呪法の実修は、当時の民間信仰に対応する求雨習俗と想像される。また、「神異経」に、「遇ウ者、之レ<sup>(119)</sup>魃」ヲ得テ、溷ノ中ニ投ズレバ、乃チ死シ、旱災銷ユルナリ。」というのは、魃を鰥に似た小動物としていた六朝期の一呪術を伝えるものであるが、これも出現した旱鬼を追い払うことによつて、旱りが熄み、雨を期待しうるとする呪術であり、さらに降つて、清代、東齊地方の里人が行なつていた「打旱魃」の習俗<sup>(120)</sup>も、この系統の同様な儀礼であつたと考えられる。

翼ある応竜は、千歳を経た竜蛇の化したものといわれる。<sup>(121)</sup> 鮮水が伊水に合流するあたり<sup>(122)</sup>（今日の河南省嵩県地区）に、その応竜に似て、翼のある怪蛇が棲むという伝承があつた。これが流域の村邑に旱魃の害を見舞うと信じられていた。

鮮山……鮮水ハ焉コニ出デ 北流シテ伊水ニ注グ 其ノ中ニ鳴蛇多シ 其ノ状ハ蛇ノ如クニシテ而カモ四ツノ翼有リ 其ノ音ハ磬ノ如シ 見ワルレバ則チ其ノ邑ニ大旱アリ 中山経次二

山東の独山から流れ出る末塗川にいてという儵鱗も、旱魃の悲劇をもたらす旱鬼であり、帝囷の川に棲むという鳴蛇も、同じく旱鬼として怖れられる対象であつたろう。

独山……末塗ノ水ハ焉コニ出デ 東南ニ流レテ沔ニ注グ 其ノ中ニ儵鱗多シ 其ノ状ハ黄蛇ノ如クニシテ魚ノ翼アリ 出入ニハ光有リ 見ワルレバ則チ其ノ邑ニ大旱アリ 東山経次一

帝囷ノ山……帝囷ノ水ハ其ノ上ヨリ出デテ其ノ下ニ潜ル 鳴蛇多シ 中山経次十一

山西の罍于母逢山の山中に源をもつ浴水の中に、首の赤い巨大な白蛇が宿するという。村々の泉井が涸れ、耕地が乾上る災害は、この大蛇が浴水から姿を現わすときに起るのであつた。

罍于母逢ノ山……浴水ハ焉コニ出ズ 是コニ大蛇有リ 赤首・白身ナリ 其ノ音ハ牛ノ如シ 見ワルレバ則チ其ノ邑ニ大旱アリ 北山経次三

ところで、上文でのべた応竜の下界出現の旱害説話を伝える大荒北経は、さらに、その災難から逃れるための雨乞い呪術として、つぎのようにのべている。

早リニシテ応竜ノ状ヲ為サバ 乃チ大雨ヲ得ル

この記述は、旱害に臨んで、青・赤などの大小幾多の竜のイミテーション<sup>(124)</sup>を造つたり、「春秋繁露」<sup>(124)</sup>「土竜ヲ為ツテ以

ツテ雨ヲ求」める（「淮南子」説山訓）など、竜蛇を模して執り行なつた漢代の雨乞い儀礼に対応するものである。このよ  
うな求雨習俗の伝統は、近年まで絶えることなく保持されてきているが、その淵源は遙かの先秦の昔に遡るものであつた  
と想像される。一般に、竜蛇神は水神として、水・旱の双方を掌管する神的表象である。人々が竜蛇の模造物を作つたの  
は、水旱の神を象どり、これに慈雨を祈願するためであつたのでなければ、その模型を焼けつく太陽の下に曝し、あるい  
は、これに火を放つて、降雨を強要せんとする呪術であつたと推測される。浴水に宿る大蛇が赤い首・白い身であると信  
じられているが、この色は火と太陽の光をシンボライズし、旱魃の鬼神にふさわしい色調である。

古来、竜蛇神は水旱の神表象の代表的存在とされてきた。しかし、山経に記録されている水旱の神々は、竜蛇の姿をと  
るもののほか、鳥獸や魚形をもつてあらわれるものなど、ヴァラエターが目立つ。つぎの蜚鼠や駿鳥も、竜蛇の形をとら  
ざる旱神であつた。

枸状ノ山……鳥有リ 其ノ状ハ雞ノ如クニシテ而カモ鼠ノ毛アリ 其ノ名ヲ蜚鼠ト曰ウ 見ワルレバ則チ其ノ邑ニ大旱  
アリ 東山経次一

鍾山……駿鳥 其ノ状ハ鷓ノ如シ 赤キ足ニシテ而カモ直ナル喙アリ 黄ノ文ニシテ而カモ白キ首ナリ 其ノ音ハ鵠ノ  
如シ 見ワルレバ則チ其ノ邑ニ大旱アリ 西山経次三

駿鳥はもともと鍾山の山神の子で、鼓と呼ばれ、人面竜身の姿をしていたと伝えられる<sup>(126)</sup>。死後、化して駿鳥と変じ、旱  
神となつたが、かつて竜蛇の形であつたのは、鼓の水旱の神としての二面性を物語るものであるのかもしれない。

このほか、鴉に似た、しかも人面・雌（猿）身で、犬の尾をもつという旱鬼が崦嵫山の中に棲むと伝えられる。  
崦嵫ノ山……鳥有リ 其ノ状ハ鴉ノ如クニシテ而カモ人面・雌身・犬ノ尾ナリ 其ノ名ヲ自カラ号ス 見ワルレバ則チ

其ノ邑ニ大旱アリ

西山経次四

獬獬は翼をもつ狐に似た怪異で、姑逢山中に棲む旱神であり、その勢威は強力で、天下に旱害を及ぼすものとされた。

獬獬ノ山……獣有り 其ノ状ハ狐ノ如クニシテ而カモ翼有り 其ノ音ハ鴻雁ノ如シ 其ノ名ヲ獬獬ト曰ウ 見ワルレバ則チ天下ニ大旱アリ 東山経次二

このほか、黒水の中に宿る獸毛を生やした鱒魚(南山経)<sup>(127)</sup>、令丘山の梟状で、四目のある鰓(南山経)<sup>(128)</sup>、翼あり、出沒ごとに光を放つ子洞川の鱒魚(東山経)<sup>(129)</sup>、膏水に棲む一目の薄魚(東山経)<sup>(130)</sup>などは、いずれも、天下に旱魃の災禍を及ぼす旱鬼であるとされている。

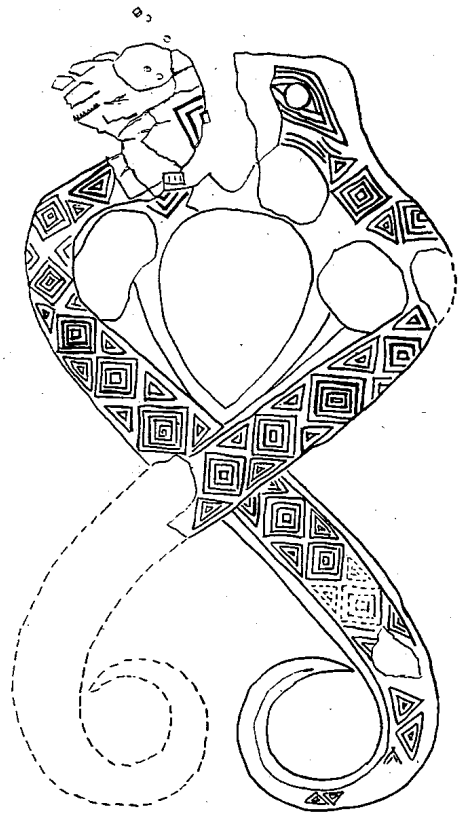
陝西省にある天下の名岳・太華の山(華山)にも、同じような旱鬼信仰があつた。

太華ノ山……蛇有り 名ヲ肥蠪ト曰ウ 六足・四翼アリ 見ワルレバ則チ天下ニ大旱アリ

西山経次一

この肥蠪と同名の旱鬼が渾夕山にも棲んでいた。

渾夕ノ山……霪水ハ焉コニ出ズ……蛇有り 一首ニシテ兩身ナリ 名ヲ肥遺ト曰ウ 見ワルレバ則チ其ノ国ニ大旱アリ 北山経次一



第四図 殷虚出土木製怪蛇遺残

この両者は名称が共通するのみならず、もともと同じ旱神の地方的ヴァリエーションであつたと考えられる。侯家莊一〇〇一号殷大墓出土の第四図の木製品遺残を、梁思永(高去尋が補筆)は一頭二身の蛇をあらわすと釈き、「山海経」のい

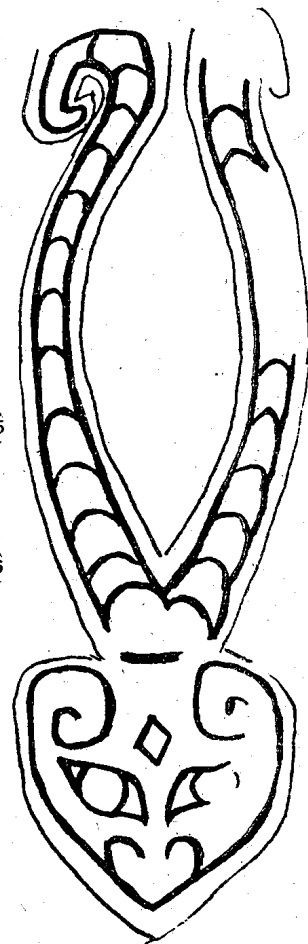
縛・捕捉できるといふ意味に理解される。また、涸川とは涸れて乾いた河川の意で、旱神・応竜の居る山が、農耕不能を意味すると思われる凶犁土丘と呼ばれた(大荒東経)ように、<sup>(138)</sup> 蝮の宿ることに基づく名称であると考えられる。<sup>(139)</sup> 鬻水の肥



第五図 怪蛇図文(1)



第七図 怪蛇図文(3)



第六図 怪蛇図文(2)

第六図<sup>(135)</sup>・第七図<sup>(136)</sup>の怪異文や図象文字は、あきらかに一頭二身の蛇を表現したもので、林巳奈夫は、これが鬻水の肥遺の形姿にアイデンティファイすることを指摘している。<sup>(137)</sup> 林はさらに、つぎにあげる「管子」水地篇の蝮も肥遺と同じ旱鬼ではないかという。

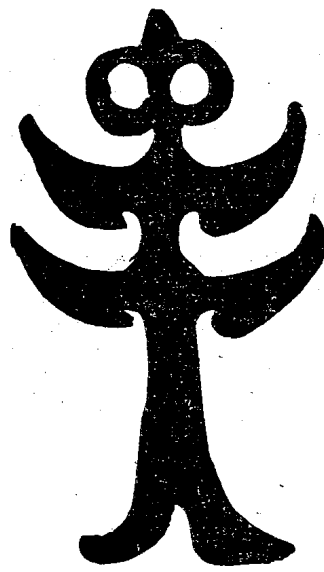
涸川ノ精ハ蝮ニ生ズ。蝮ハ一頭ニシテ而カモ兩身ナリ。其ノ形ハ蛇ノ如シ。其ノ長サハ八尺。其ノ名ヲ以ツテ之レヲ呼ベバ、以ツテ亀鼈ヲ取ルベシ。此レ涸川ノ水ノ神ナリ。

思うに、蝮と肥遺は共に水の怪で、一首両身の姿が類同するだけでない。蝮・遺(蝮)は同音で、肥遺はこの蝮の名が引申したものである。なお、蝮の名を呼べば、水中の魚や亀などを捕えることができるというのは、呪術的な捕魚法を述べたもので、河川の水を涸らす靈力をもつこの蝮の名を唱えることによつて、魚鼈を呪

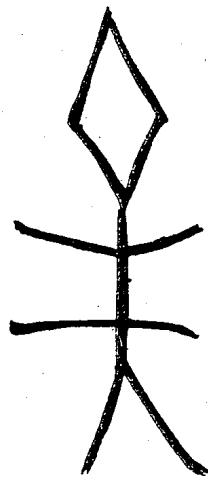
う肥遺蛇に比定されるという。<sup>(132)</sup> しかし、この発掘物は腐蝕が甚しく、頭部を一つの首と断定するには、なお問題もないわけではないが、<sup>(133)</sup> 西周初期の作冊大方鼎上の第五図を<sup>(134)</sup> はじめ

遺が出現すれば、国中が大旱に悩まされるという上掲の西山経の文や北山経の記録は、鰲が涸川の水神であるとする「管子」の文と相通じ、相補い合つて、その実体を明らかにするものである。

蔵経本によれば、渾夕山の肥遺は、一首両身で、しかも四脚があるとされる。<sup>(140)</sup> 蛇に足のあるのは、文字通り蛇足であるが、水怪・旱鬼のたぐいが、足や翼をもつとしても必しも異とするには及ばない。数こそちがうが、太華山の肥遺も足をもつと信じられていた。林は、第八図<sup>(141)</sup>および第九図<sup>(142)</sup>の甲骨文字を一頭二身の蛇を表現したものと解するが、一見して、第



第八図 怪蛇甲骨文(1)



第九図 怪蛇甲骨文(2)

より、翼状にも解され、むしろ、太華山の肥遺の四翼を描写したものでらしくみえるのである。いずれにしろ、肥遺や鰲のもつという脚や翼は、水旱を司るこの鬼神たちの神性表象で、かれらの去来・出没は、この翼や脚足によつてなされるものと信じられたのであるのかもしれない。

「玉篇」に、蠃ハ肥蠃。蛇ノ名。とし、

一首二身六足四翼。見ワルレバ則チ天下ニ大旱アリ。湯ノ時、陽山ノ下ニ見ワル。

とある。湯王の時代に、この怪蛇が出現したという伝承を、郭璞も西山経次一<sup>(144)</sup> 太華山の条に注記している。天下の大旱に際会して、湯王が桑林に雨を祈つた史話は、「竹書紀年」・「呂氏春秋」順民篇・「淮南子」主術訓のほか、「荀子」その他

五図などと異なる点は、軀部からでる四肢状のものの描写である。これが蔵経本のいう肥遺の四本の脚であるかもしれない。しかし、第八図を子細に観察すれば、付け根が細く、先端が彎曲して尖がり、足を表現するものという

の多くの史書にとり上げられているが、<sup>(145)</sup>その大旱魃の原因に言及したものは、ほとんど皆無である。従つて、「玉篇」や郭注の説の出所・根拠も定かでなく、また、それが殷初の史実であつたとは考え難いから、殷湯治下の数年に及ぶ大旱魃が、旱神・肥遺の出現によるという伝承を、もちろん、そのまゝ信用することはできない。だが、湯王のときの大旱といえば、湯王桑林に禱るのそれであろうし、肥遺信仰はすでに殷代に存した痕跡があるのであるから、「玉篇」に記述するような事件が、伝説と信仰の上に実在した可能性は十分にある。

旱鬼の怪蛇と湯禱桑林伝説の結合を示唆する二・三の資料がある。その一つは、

彭飢ノ山……蚤林ノ水ハ焉コニ出デ 東南流シテ河ニ注グ 肥水出デ 南流シテ牀水ニ注グ 其ノ中ニ肥遺ノ蛇多シ

北山経次三

の記事である。山経は既出と同名同質の場合は、そのものの属性等について説明・解説を省略するのが一つの傾向である。従つて、この肥遺は、鬻水に棲む旱鬼である一首二身の肥遺と同一存在であるにちがいない。そして、その肥遺蛇は、桑林水と肥水の両河川に棲むと信じられていたと解される。「其ノ中ニ肥遺ノ蛇多シ」の「其ノ中」とは、両河川を指すもので、肥遺蛇多しとは、これら河川の沿岸各地の村里に、この旱鬼信仰の存在したことを意味するものと解釈すべきである。仮りにもし肥水中にのみ宿るもの意としても、同じ山に源をもち、東南と南のほゞ同方向に流れる二つの川である。蚤林水が当然、肥水にごく隣接し両者襟帯の間を流れていたものと推定される。肥水の旱鬼が蚤林水に遊行することは、当然ありうることである。さて、そこで、この川の名の蚤林が湯禱の地・桑林と音通する点は、見落し得ないのである。

第二の資料は、肥蠃がその山麓に現われたという陽山に関するもの。さきに、鮮山から流れでる鮮水の中に、蛇状有翼で鳴蛇と呼ぶ旱鬼が棲むことをのべた。この鮮山の西に続いてあるのが陽山である。「水経注」によれば、<sup>(146)</sup>世人はこの陽山の一部の地を太陽谷と呼んだというが、この太陽谷の名は涸沢を連想させる地名で注目させる。さて、この陽山は鮮山の



西三百里にあるというが、畢沅・郝懿行ともに、三百という数字は三十の誤りとする<sup>(147)</sup>。古里は三百歩を一里とする<sup>(148)</sup>。従つて、陽山と鮮山はごく峯続きの山で、その高低によつては、主・属の關係に立つ山であろう。とすれば、鮮山から出る鮮水の鳴蛇が、陽山の下に去来したとしても不思議ではない。

湯禱桑林と肥蠶の關係を示唆する第三の資料は、周の武王が即位に當つて盟誓した時の事情である。この件は、「呂氏春秋」に、

微子開（啓のこと）ニ共頭ノ下ニ就カシメテ、之レト盟ツテ曰ク。「世々、長侯ト為シ、殷ノ常祀ヲ守ラシメ、桑林ヲ奉ゼ相メ、宜シク孟諸（沢の名）ヲ私スベシ。」ト。三書ヲ為リテ辞ヲ同ジクシ、之レニ血ヌルニ牲ヲ以ツテシ、一ヲ共頭ノ下ニ埋メ、皆ニ一ヲ以ツテ帰ル。（誠廉篇）

と記されている。殷の常祀するところであつたという桑林は、おそらく湯王求雨の伝承をもつ聖なる地であろうが、これに接する共頭が山名であつたことは、上述の文意からも明らかで、高誘の注にも、共頭とは共首山のことであると記述されている。この地名の共頭ないし共首とは、二匹の蛇が一つの頭首を共有すると伝えられる肥遺の、その異様な姿に基づくものであり、この山が、かゝる怪異の宿るところであつたが故の命名であつたのではなからうか。

思うに、各所の山川には、蠶・肥遺等々のさまざまな旱神・旱鬼の信仰があつた。そして、日照りの災害に襲われるたびに、人々は相い集まつて、鬼神を宥め、その退居を歎願し、雨乞いの儀礼を執り行なつたと考えられる。湯禱桑林の伝説は、そのような儀礼の典型として史話化されるとともに、この伝承が各地の旱魃伝説や、後世の求雨儀礼に影響するとも少なくなかつたと想像される。

湯禱桑林伝説にみる積薪上に自焚する人身供犠は、古代中国社会に行なわれた一つの求雨儀礼を伝えるものである。ト辞の<sup>ㄅ</sup>・<sup>ㄆ</sup>・<sup>ㄇ</sup>などは、のちの爻字に比定される。これは、木を交叉して燃やすことの表示とする甲骨学者（羅振

玉ら) も多いが、葉玉森は脛を交錯した人間を火の上に投じた象形とし、さきへのべた殷湯王の救旱犠牲説話を引用するほか、金祖同・胡厚宣らも、「左伝」僖公二十一年の条の、「夏、大旱ス。公ハ巫尫ヲ焚カント欲ス。」・「春秋繁露」求雨篇の「春、旱リシ、雨ヲ求ム。巫ヲ暴シ、尫ヲ聚ム。」などの焚巫求雨に対応する意味内容の文字と解いている。<sup>(149)</sup>人間を犠牲として曝し、あるいは、これを焚く呪術の淵源は不問にふすとして、古代中国社会にあつても、これが決して稀有な儀礼であつたとは思われない。

「晏子春秋」諫上に、齊の景公が大旱に際会し、自から宮殿を出て、三日間、曠野に暴露して大雨を致した、といわれている。また、この事件は、「新序」卷二に

昔、齊ノ景公ノ時、天、大旱三年、トシテ曰ク。「必ず人ヲ以ツテ祠レバ、乃チ雨フル」ト。

とあるのは、先秦時代の雨乞い儀礼に、ヒューマン・サクリファイイスの行なわれたという伝承が、漢代にも遺伝していたことを想像させるものである。早魃時におけるこの種の自己犠牲的伝承は少なくない。たとえば、「後漢書」独行列伝は、載封や諒輔がそれぞれの任地で早魃に際会し、長官の身でありながら、積薪に上り、自から犠牲とならんとし、窮民救済に当つたという逸話を記録している。湯禱桑林の伝承ときわめて類型的であり、湯王の故事へのいわゆる「祖型化」を想わせるものであるが、これも、人身供犠を伴う雨乞い儀礼が、中国古代社会に行なわれたことを推測させる史話である。

河南省南陽の東北に豊山と呼ぶ山があり、<sup>(150)</sup>この山の山神の名を、人々は耕父と呼んだ。

……神耕父ハ之レニ処ル 常ニ清冷ノ淵ニ遊ブ 出入ニハ光有リ 見ワルレバ則チ其ノ国ハ敗ヲ為ス 中山経次十二

袁珂は、国が敗をなすとは国家の滅亡する意味であるというが、<sup>(151)</sup>これは適切な解釈ではない。結果的には荒廢に帰し、国家の盛衰・興廢につながることもあろうが、すでに述べたように、敗とは一般に水旱蝗などの災禍による凶年のことで

あり、<sup>(152)</sup>この豊山地方では、おそらく、この山の耕父神のために、広域にわたる水災ないし旱害が蔓延するという信仰を記録したものとみるべきである。それはこの山神の去来の様相が、すでにみてきた水神・計蒙その他と典型的であること、あるいはまた「耕父ハ早鬼」(「文選」李善注)<sup>(153)</sup>であると伝えられているからである。この山神の名の耕父も、農耕神を連想させるものがあり、さらに、後述のように、<sup>(154)</sup>この神の鎮座する豊山の山上に、九個の鐘があり、自から鳴つて農民たちに降霜の時を告げると伝えられているのも、耕父の宿る豊山が農神信仰に深い関係をもつていたことを物語る。

豊山の神・耕父の出入すると伝えられる清冷の淵には、北人無沢の入水伝説がある。「莊子」讓王・「呂氏春秋」離俗によれば、舜がその友人の石戸之農に帝位を譲ろうともちかけると、石戸之農はこれを恥じ、早々に一族をひきつれて、海に入つて終身帰らなかつた。ついで、舜は別の友人の北人無沢に讓位を相談すると、無沢もまた、「われ これを羞づ。」といふ、自からこの清冷の深淵に投身したという。許由の潁川に耳を洗う故事に類するこの伝説は、無沢らを高潔の隱君子とする道家的作為が目立ち、もちろん、史実でありようもない。しかし、伝承のすべてが捏造された教説であつたとは考え難いものがある。無沢の清冷投身伝説と、耕父がこの淵に去来するという信仰とは、全く断絶した伝承であつたのであろうか。資料の不足は、徒らに想像を逞しくするが、後世の、学説を弄する者が、舜の禅讓にかづけたと想像される無沢の入水は、実は、この靈淵に出遊する早神・耕父と無縁ではなく、それは農耕儀礼と関係した聖なる行為<sup>(155)</sup>ではなかつたろうかと疑われるのである。無沢と並び称せられるもう一人の隱君子が、農耕そのものを意味する農の名で呼ばれているのも、偶然とは思われない。上述のように、湘山の女神たちは、堯の娘・舜の妻妃であるとされ、彼女らは江湖の間に死し、湘山の神に祀られたと伝えられる。たゞし、その死因まで触れる伝承は、古史書の中に認められないが、蒼梧で逝去した舜のあとを追つて、湖水に投身したという伝説が一部に存したらしく、このことが、漢代以降の書にみえている。<sup>(156)</sup>もし、その伝説の語る入水説に、伝承的眞実があるならば、舜の二妃と石戸之農・北人無沢の両説話に、若干の類型が指摘

できるのである。すなわち、一つは舜の王妃、他は同じ舜の友人で、双方ともに入水して死を選んだという共通点であり、また、前者が入水した地方である瀟湘の淵と、後者投身の清冷淵に、山神が去来し、その進退には必ず水旱の災禍を伴なうという信仰の存在した類似である。もちろん、耕父イコール無沢とする確証はなく、また、上掲の諸伝承は一つの完結的脈絡の裡に整理・復元できるほど均質な断片でもない。しかし、これらの伝承の破片は、水旱の神と、それらに対して行なつたであろう古代の農耕儀礼としての人身供儀の微かな面影を感じさせるものがあるといえ、これは断章取義の謗りをうけるであろうか。

郭璞は、清冷の淵は西号郊（西鄂）県の山上にありとし、神が来臨するとき、この淵の水が赤色を帯びて光り輝くという伝説のあることを挙げ、淵の傍に「今、屋有り。之レヲ祠ル。」<sup>157</sup>と記している。三国時代にも山経以来の山神信仰が絶えず、豊山の山上淵のほとりに社屋があつて、耕父を祠つていたことが知られる。

「神農求雨書」に、

春夏ノ雨フル日ニシテ雨フラスバ……命ジテ青竜ヲ為リ、又、火竜ヲ東方ニ為リ、小童ハ之レヲ舞ス。……此ノ如クシテ雨フラスバ、処ヲ潜メ、南門ヲ闔シ、水ヲ其ノ外ニ置キ、北門ヲ開キ、人骨ヲ取りテ之レヲ埋ム。此ノ如クシテ雨フラスバ、巫祝ニ命ジテ之レヲ曝ス。之レヲ曝シテ雨フラスバ、神山ニ薪ヲ積ミ、鼓ヲ撃チテ、之レヲ焚ク。<sup>158</sup>

と、求雨儀礼の次第を説いている。この書は神農に名を借りた後世の偽書であり、かつ、祈雨儀礼に、上記のレパートリーのすべてが、つねに、このような順序に従つて執り行なわれたものではあるまい。むしろ、この書は、古代社会に行なわれたと考えられる各種の雨乞い呪術のいくつかを総集したものである。古代中国社会の請雨には、呪文吟唱・雨乞い歌の詠唱・舞雩・溝洫掃除・燔燎・撒水・模造神ないし人儀の暴露や炮殺などのほか、雨水の清祓を期待す

る腐肉・人骨の埋匿や、池川の汚染などのさまざまな呪術もあつた。これらの呪術・儀礼には、当然、動物犠牲を含む各種の供物が用意されたであろう。そして、これら呪術・儀礼の多様さは、各地の山川に宿るさまざまな旱神に対応するもので、しかも、それら呪術・儀礼は村里により、国々によつて、また、民間と統治階級によつて、それぞれ異なつた形式と意味付けをもちながら、伝承し展開してきたものと想像される。

天下の大旱魃に、周室で歌われたとされる雨乞いの歌（雲漢）の一節、

天ハ喪乱ヲ降シ

饑饉ハ薦<sup>シキ</sup>リニ臻ル

神トシテ挙ゲザル靡<sup>ナ</sup>ク

斯ノ牲ヲ愛ムコト靡シ

圭璧ハ既ニ卒<sup>ツ</sup>キタルニ

寧ンゾ我ヲ聴ク莫キヤ

の中の、「神トシテ挙ゲザル靡ク」とは、「礼記」にいう「天下ヲ有スル者は百神ヲ祭ル」（祭法）に対応するものである。おそらく、上掲してきた各地の水旱の神々も、天子の祭祀の対象とする凡百の神々の中に算えられていたであろう。これに対し、「諸侯ハ其ノ地ニ在リテ則チ之レ（その地の山川の神）ヲ祭ル」（同上祭法）とされる。周の武王が微子啓と共頭山麓に誓盟し、彼に桑林を奉ぜしめ、孟諸の沢を領有させたのは、「其ノ地ヲ亡ナエルトキハ則チ祭ラズ」（同上祭法）とすべきところを、諸侯の一人として認め、微子啓に殷の常祀を守らしめ、常祭の山川の神々を奉じさせたことを意味するものであつたと解される。そして、その国家神的性格をもつ桑林・孟諸の神々とは、実は水旱の神性をもつ蠲・肥遺のごとき山川の鬼神であり、ないしは、それらをも含むものであつたのではないかと想像されるのである。

註

(116) 南方有人 長二三尺 袒身而目在頂上 走行如風 名曰魃 所見之國大旱 赤地千里 一名貉 遇者得之投溷中乃死 旱災消也(「芸文類聚」一〇〇卷に引く) なお、一書に 名騷一名格子 とある。(出石誠彦「上代支那の旱魃と請雨」(支那神話伝説の研究 四五三頁参照))

(117) 「北齊書」卷八 本紀の武平五年五月大旱の条に 晉陽得死魃 長二尺 面頂各二目 帝聞之 使刻木為其形以獻

なお、「魏書」によれば、咸平五年、晉陽で死魃長二尺 面頂各二目 なるを得、「通考」には、永隆元年、長安で 女魃長尺有二寸 なるを獲たという。(「山海經箋疏」大荒北經の条による)

(118) 大荒北經に 有人 衣青衣 名曰黃帝女魃 と人格化されている。

(119) 「太平御覽」卷八八三 鬼神部に引く。

(120) 「山海經箋疏」大荒北經の魃の箋疏による。

(121) 「広雅」有翼曰應竜 なお、「神異經」に 竜千年為應竜 とある。

(122) 沅曰爾雅云小山別大山鮮 是其義 水經云伊水東北過郭落

山 注云有鮮水出鮮山 山当在今河南嵩県(「山海經新校正」)

(123) 「山海經新校正」の北山經次三の末文に、畢沅が 此經之山自河南北至山西也 と説くのに拠り、次三の最末尾に記録されてある罽于母逢之山を山西省の山と比定した。

(124) 「春秋繁露」求雨に、春旱求雨 以甲乙日為大青竜一長

八丈 居中央 為小竜七 各長四丈 於東方皆東郷 其間相去八尺 夏求雨 以丙丁日為大赤竜一 長七丈 居中央 又為小竜六……於南方皆南郷……季夏……為大黃竜一……秋……為大白竜一……冬……為大黒竜……

これは五行思想等で潤色された超形式主義的儀礼であり、果して、額面通りの実修があつたか疑わしいが、竜蛇模擬による民間の求雨呪術がこの根底にあつたことを想像させる。なお、出石「上代支那の旱魃と請雨」(「前掲書」)四五四〜六一頁参照

(125) 「中華全国風俗志」(大達図書供給社 民國十一年) 下篇 卷一 八二頁 同卷五 二二頁 その他。載三楚「築竜求雨」(「新生副刊」民國五年二月四日号 杜而未「鳳麟竜考釈」(台湾商務印書館 人文庫 民國五五年)による。)

Elliot Smith: The Evolution of the Dragon, 1919 London & New York.

など、内外の關係書多し。

(126) 鍾山 其子曰鼓 其狀人面而竜身……鼓亦化為駿鳥……

(127) 雞山……黒水出焉而南流注于海 其中有鱗魚 其狀如鮪而

鱗毛 其音如豚 見則天下大旱 南山經次三

(128) 令丘之山……有鳥焉 其狀如梟 人面四目而有耳 其名曰顛 其鳴自号也 見則天下大旱 南山經次三

(129) 子桐之山 子桐之水出焉而西流注于餘如之沢 其中多鱒魚 其状如魚而鳥翼 出入有光 其音如鴛鴦 見則天下大旱

東山經次四

(130) 女烝之山……膏水出焉而西流注于鬲水 其中多薄魚 其状如鱸魚而一目 其音如歐 見則天下大旱 東山經次四

なお、「初学記」にこの経文を引き「……見則天下反」に作る。

(131) 「芸文類聚」卷九七 その他に、この経文を引き、肥遺に作る。

(132) 中央研究院歴史語言研究所「中国考古報告集之三『侯家莊』

第二本 一〇〇一号大墓 上冊」(台湾・中央研究院歴史語言

研究所 一九五七年)挿図二九 五六頁

(133) 伊藤清司「井逢と協脅と」(「前掲書」) 六八頁

(134) 容庚「善齋彙器図録」(北京・考古社 一九三六年) 四三

(135) 黄濬「鄴中片羽」三集(北京・尊古齋景印本 一九四二年

下 一五頁

(136) 千省吾「商周金文録遺」(北京・一九五七年) 四八七

(137) 林巳奈夫「殷周時代の遺物に表わされた鬼神」(日本考古

学会「考古学雑誌」第四六卷二号 昭和三五年) 三八〜四二頁

(138) 「説文」に、涸 渴也 「爾雅」釈詁に、涸 竭也 「礼

記」月令に、仲秋之月 水始涸

(139) 「韓非子」説林上に、涸沢之蛇 の語あり、これを神性とみている。この涸沢も旱鬼の棲み処であることからでた名称であらう。

(140) 「山海経箋疏」 渾夕之山の条の郝箋疏による。

(141) 千省吾「前掲書」四一

(142) 羅振玉「殷虚書契」(北京・一九二一年) 五・七・五

(143) 林巳奈夫「殷周時代の遺物に表わされた鬼神」(前掲書) 三九頁

(144) 湯時 此蛇見於陽山下

(145) 鄭振鐸「湯禱篇」(上海・古典文学出版社 一九五七年) 一〜三二頁 参照

その他、関係論文多し。

(146) 「水経注」卷十五 伊水の条、湯水出陽山 陽溪 世人謂之太陽谷

(147) 原文は、鮮山……又西三百里曰陽山……。「山海経新校正」

・「山海経箋疏」ともに三百里は三十里の譌字とする。

(148) 「穀梁伝」宣公十五年の条に、古者三百步為里

(149) 葉玉森「殷虚書契前編集釈」卷五 三五〜六葉 金祖同「殷

虚遺珠發凡」二九葉 胡厚宣「卜辞中所見之殷代農業」一一三

葉

なお、この項は池田末利「告祭考(中)」の五 零の篇(「広島大

学文学部紀要」二二卷一号 一九六三年)に負うところが多い。

(150) 沅日(豊) 山在今河南南陽府治東北(「山海経新校正」)

(151) 袁珂「中国古代神话」(上海・商務印書館 増訂本七版

一九五七年) 九三頁

(152) (70) を参照

(153) 「山海經新校正」に、沅曰李善注文選云耕父旱鬼也 とある。

たゞし、現行本の「文選」には、張衡南都賦の条の 耕父揚光於清冷之淵 の李善注は、中山経を引き、有神耕父云々と釈するだけで、旱鬼の文字は見えない。もともと、郡国志に、注として、劉昭が引く李善注の文には、耕父旱鬼也 とみえてゐるから、耕父を早りの神とする伝承の存在性が想定される。

(154) 豊山……有九鐘焉 是知霜鳴 中山経次十一

(155) 「莊子」釈文に、石戸 地名 農 農人也 という。耕父もまた農人の意味をもつ。

なお、森安太郎も、北人無沢と石戸之農の伝承に、農耕の人身犠牲を推定している。たゞし、耕父を舜帝とし、また、豊山……其上多金 其下多穀柞杻榘 の穀を穀物と解し、舜神の棲む豊山を穀物の豊穰な山とするなどの見解（「舜の農神性」京都女子大学「人文論叢」第七号 昭和三十七年 十四頁）には、

直ちに賛同しかねるものがある。穀はクワ科の落葉灌木名で桑や柞と連称される。

(156) 「列女伝」卷一 有虞二妃 「述異記」卷二

(157) 清冷水在西号郊阜山上 神來時 水赤有光耀 今有屋祠之

（山海経郭注）なお、西号郊は西鄂の誤衍とされる。（「山海経箋疏」・「山海経新校正」）

(158) 「芸文類聚」卷一〇〇 災異部 旱の項に引く。

(159) 「史記」宋微子世家 周武王伐紂克殷 微子乃持其祭器造於軍……於是武王乃積微子 復其位如故

「呂氏春秋」慎大篇 武王勝殷……立成湯之後於宋 以奉桑林

「同書」誠廉篇 （武王）使保召公 就微子開於共頭之下 而与之盟曰 世為長侯 守殷常祀 相奉桑林 宜私孟諸 三書同 辭 血之以牲 埋一於共頭之下 皆以一婦

#### 第四節 蝗 蝻 の 神

天空を蔽つて襲来し、たちどころに禾苗勦尽、民衆殆んど飢えに死すといわれる蝗蝻の害は、水旱などの自然災禍と変わるころのない打撃を人々に与えた。王楨は、春秋時代の二四二年の間に、「大イニ年有リト書スルハ、僅カニニニシテ而カモ水旱蝻蝗ハ屢シバ書キテ絶エズ」（「農書」）とのべ、徐光啓も、春秋から戦国までの期間に、蝗害のあつたことを記した月件数は、実に一一一に達することを指摘し、（「農政全書」）古代中国社会において、蝗害の甚しかったことを強調し



ている。<sup>(160)</sup>「詩經」小雅の大田に、蝗蝻の害が田苗に及ばざらんことを祈る一節があり<sup>(161)</sup>「周礼」秋官には、害蟲驅除を掌る諸役人と、呪法をまじえたその防除法が記述されている。<sup>(162)</sup>これらは、蝗蝻などの害蟲の被害が人々を悩まし、その対策に腐心していたことを物語るものであるが、当時の人々は、そのような飛蝗の災害に、水旱同様、超自然的な勢威の作用を感じていたのである。

余義ノ山……獸有り 其ノ状ハ菟ノ如クニシテ而カモ鳥ノ喙・鷗ノ目・蛇ノ尾アリ 人ヲ見レバ則チ眠ル 名ヲ**狢**ト曰ウ 其ノ鳴クヤ自カラ訃ブ 見ワルレバ則チ蝻蝗ハ敗ヲ為ス 東山經次二

この奇獸の「眠ル」とは、「瞑スル」こと、(畢沅・郝懿行)すなわち「佯死」(郭注)の意味と解される。「広韻」に、「**狢**ハ獸ニシテ魚ニ似、蛇ノ尾・豕ノ目、人ヲ見レバ則チ佯リ死ス」と述べられている**狢**は、余義山のそれと同一存在を釈いたものであるが、これは四足が獸のそれで、鱗甲の被うさまは水魚に類し、尖れる喙は飛鳥に似、細く長い尾は蛇の尾に近似する竜魚(郭璞)・鯪魚(陶弘景「名医別録」等)、今日いうセンザンコウ(Manis Pentadactyla L.)の姿を彷彿させる。しかも、これは水陸兩棲で、日中は水辺に鱗甲を開いて、死せるが如き状を呈し、蟻を甲の内部に誘い入れるや、忽ち、甲を閉じて水中に入り、再び、甲を開き、浮上する蟻を喰うという<sup>(163)</sup>。あるいはまた、<sup>(164)</sup>性甚だ怯で、驚愕すれば、頭を前肢の間に隠蔽し、恐るべき強敵に遇えば、体をまるめ、鱗甲をそばだてて身を防ぐという。<sup>(165)</sup>**狢**が眠り、佯り死すとは、このような習性の觀察からでた解釈にちがいない。また、<sup>(166)</sup>**狢**という名称は、このセンザンコウの擬声語(Onomatopöie)で、「其ノ鳴クヤ自カラ訃ブ」とは、このことをいつたものであると考える。擬声語をもつて、鳥獸の呼び名とする類例は山經の内外にも多い。たとえば、「本草綱目」卷五一に、「猫 苗茅二音 其ノ名ハ自カラ呼ブ」とあり、「酉陽雜俎」続集八に、「猫 一名蒙貴」とあるが、苗茅・蒙貴はともにネコの鳴き声である。<sup>(166)</sup>自己の名を呼ぶという字義から解いても、また、センザンコウの鳴き声と**狢**の名との音聲的比較から推しても、**狢**はセンザンコウを

連想させずにはおかない。

このように、**犭涂**の属性描写はかなりリアリティクであつて、具体的にセンザンコウを指標するもの、ないしは、センザンコウに基づいて形成された異形なる神の表象と考えられるが、さらに、センザンコウの棲息地および蝗害多発地帯と、「山海経」が**犭涂**信仰を収録した方位とも吻合することが指摘される。すなわち、いわゆる「シナセンザンコウ (M. Pentadactyla dalmani Sundevall.) は、揚子江流域以南に広く分布するが、<sup>(167)</sup>**犭涂**記事が東山経に収録されてるのと相い照合し、両者の方位的な齟齬はない。つぎに、陳平祥は、中国地方志にみられる蝗害駆除を対象とする八蜡廟・劉猛將軍廟の分布をもつて、中国蝗蟲災害分布図の作製を試みた。これによれば、黄河下流域の河北・山東・河南地区に、蝗害が最も多く、その周辺地帯がこれにつき、華中以南は漸減し、福建など東南沿海には、八蜡・劉猛の廟はなく、蝗害が稀有であることを物語るといふ。<sup>(168)</sup>もし、この蝗蟲災害の分布図が、古代中国社会に遡つてそのまま適用できるものと仮定すれば、<sup>(169)</sup>東山経に蝗害神の記録されていることは、この点でも、地域的吻合をみとめることができる。

さて、**犭涂**にセンザンコウのイメージが強く打ち出されているものと想像されるが、この点は、上掲した一連の妖怪や異形の鬼神類と比較し、やゝ異なるカテゴリーの神表象であり、むしろ、釐山の犀渠のそれと類似する。あるいは、その鳥獸魚蟲の特質を兼有するセンザンコウに、古代の人々は怪異性を見出し、神性を感じたのかもしれない。たゞし、何故、**犭涂**の去来・出没が蝗蟲の害と結びつけられて、信仰にまで昇華したのであるうか。人々はその堅牢な鱗甲に被われた形姿から、外観的連想を通じて、蝨蝗の司神的存在を覗いたのであるうか。センザンコウをめぐつて、すでに失われた何らかの伝承があつて、それが蝗害に結びつくものであつたのであろうか。すべては、われわれの想像にまかせられたまゝで、それを解く手がかりは全く見当らない。なお、山経は余峩山のそのほかに、蝗害関係の記録がなく、とくに、蝗害の多発地帯と目される黄河下流以外の地域に、害神信仰ないし伝承の存在が収録されていないのは、注意すべき点であ

る。春秋・戦国時代の蝗害発生地点の明示されているのは、ほとんど山東に限られているのは、そのまゝ当時の蝗害発生分布を示すというより、データの主要な出所である「春秋」という資料の所在に依るものとも考えられるが、紀元前後以前のそれを「史記」・「漢書」・「後漢書」によつてみる限りでは、発生地区の示されているものは、青州、あるいは「東方従り飛来ス」と記すものが目立つ。山経に蝗害神記事が、余巖山のその一例しかないという事実が確かな意味をもつものなら、それはこの地方が蝗害災害の最も多い地方であり、それ故の**玃**信仰の存在であつたと見なされるが、速断はつしまなければならぬであろう。いずれにしろ、シナセンザンコウの棲息北限に接し、かつ、蝗害多発地帯に属すると推定される地域に、蝗神信仰の存することが東山経に記録されているのは、山経の記述の一つの真憑性を示すものである。

註

四年)一〇四頁

(160) 周堯「中国早期昆蟲学研究史(初稿)」第二章 害虫的防

(165) 「玉篇に」玃 音九 獸似兔 および**玃** 獸似兔。 郝懿

除 および附表2 歴代蝗蟲災害統計表、附表3 歴代螟蟲災

行は、**玃**を**玃**の譌字とする。

害統計表(北京・科学出版社 一九五七年)二七〇四二頁およ

(166) 金沢庄三郎「猫と鼠」(東京・創元社 昭和二年 亜細

び七八〇一一二頁

亜研究叢書 第一輯)一五〇七頁

(161) 大雅・大田

(167) 阿部余四郎「支那哺乳動物誌」(東京・目黒書店 昭和十

去其螟螣 及其蠹賊 無害我田穉 田祖有神 秉畀炎火

九年)二四七頁

(162) 「周礼」秋官 庶氏掌除毒蟲 以攻說禱之 嘉草熏之 凡

(168) 陳平祥「中国方志的地理学価値」(香港中文大學出版 一

敵蟲則令之比之 剪氏掌除蠹物 以攻禦攻之、以莽草燻之 凡

九六五年)三二〇四二頁。同学可児弘明氏の教示による。

庶蟲之事 赤拔氏掌除牆屋 以屨炭攻之 凡隙屋除其狸蟲 蠹

(169) 周堯「中国早期昆蟲学研究史(初稿)」の附表2・3によれ

氏掌去鼯鼯牡鞠 以灰酒之則死 以其煙被之則草蟲無声 蠹涿

ば、古代においても、山東を中心とする地方が、蝗害多発地帯

氏掌除水蟲 以炮土之鼓敵之 以焚石投之

であつたことが推定される。たゞし、これは史料の在り方と、

(163) 陶弘景「名医別録」(「本草綱目」卷四三)

その解釈の仕方に問題がなくもない。本文参照のこと。

(164) 梅村甚太郎「東邦薬用動物誌」(名古屋・任他楼 大正十